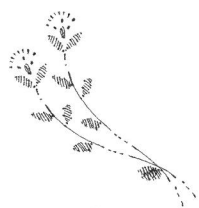


# 人とつむぎ、織りなす日々のなかで 高齢期の発達

## 第1回 高齢になった知的障害のある人たち



張 貞京

ちゃん ちよんきよん／京都文教短期大学准教授。共著『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

誰もが生き続けていけば、身近な人の老いや死、やがては自分自身の老いと死と向き合うことになります。衰えと不安ばかりが募っていきそうに感じますが、直面した衰えと不安に悩みながらも向き合い、他者と支えあって日々を生きる人たちがいます。ていねいに時間をかけてとりくまれてきた先にある高齢期だからこそ見せる発達の姿は、他者と共に生きることの意味を教えてください。

連載では、滋賀県にあるもみじ・あざみに暮らす障害のある人たちのそれぞれの人生をみつめながら、高齢期の発達について12回にわたって考えていきたいと思えます。

### ■高齢期の理解と支援

ここで、高齢期のとらえ方について考えていきましょう。WHO（世界保健機構）は、65歳以上の人を高齢者と定義しており、昨年12月には2021年から2030年を「健康な

って、本人が心身の不調を適切に表現することがむずかしく、周りの人にもわかりづらいため、気づいたときには深刻な状態になっていることもあります。疾患だけでなく、身近な人の老いや死に直面して見せる悲しみや不安についても、表し方は一人ひとりちがいで、周りが気づけないことがあります。言葉で思いを表現することがむずかしい人も、悲しみや不安などからくる変化だと考えられる姿を見せますが、時に表現が適切でないことがあり、周りが理解して支援することをむずかしくします。知的障害の程度や表現の適切さに関わらず、どのような表現か、変化のタイミングはいつかなど、いま見せている姿だけでなく、これまでの姿をふまえてその変化を的確にとらえていくことが必要です。

心身の不調や不安などの表現の困難さに加えて、支援する人の本人理解と関わり方によっても対応が左右されます。たとえば、就職したばかりの職員なら、目の前の人は出会ったときから知的障害のある「高齢者」の人とだけ映っているかもしれません。また、言葉で思いを表現できる人だとしても、支援する職員に対して、いつでも誰にでも思いを伝えるわけではありません。知的障害のある人たちの高齢期を支援していくためには、その人がどのような生を営んできたのか、それまでの日々を知り、理解しようとする姿勢があつてはじめて、その人の表現が見えてきますし、思いを伝えてくれようとする姿に出会うことができます。

### ■日々を生きる日々

高齢化の10年」と宣言し、すでにとりくみが始められています。その宣言のなかに「年齢と高齢化に対する私たちの考え方、感じ方、行動を変える」ことが挙げられています。これは世界的に高齢化が進み、その対策が求められている現状を物語っていますが、なによりも高齢化に対する認識の変革が必要であることを意味しています。

つまり、高齢者の機能低下ばかりに注目し、介護をうけるばかりの存在としてではなく、高齢者一人ひとりの人格を認め、喪失も含めたさまざまな変化を通して高齢期が発達のな意味をもつ可能性があることを明らかにしようとしています。

しかし、障害がある場合の高齢期について理解することにはさらなるむずかしさがあります。特に、知的障害がある人は、老化現象が早いとされています。生来的な問題も考えられますが、心身の不調や疾患に対する気づきや対応のむずかしさが影響しているといわれています。知的障害の程度によ

もみじ・あざみは、近江学園の流れを汲み、1953年に大津市内につくられた「あざみ寮」から始まりました。その後、石部町（現湖南市）に「もみじ寮」とともに移転し、1969年からしごとと暮らしを集団でつくりあげる日々にとりくんでいます。一人ひとりの入所時期は異なりますが、ほとんどの人が幼いころからもみじ・あざみで暮らし始めています。現在は20代から90代までの人たちが暮らしています。私は30年ほど前から通い続け、エネルギー溢れる30代、40代だったみなさんが年を重ねていく姿を見ました。入所しているみなさんとその家族も高齢となり、何人もの人が亡くなっています。

老いた家族の変化にとまどい、不安定な姿を見せたり、大切な人の死を受け入れられなかったりします。重い疾患であったにも関わらず、本人の希望で暮らしてきた場所で闘病した末に、看取られた人もいました。表現の手段や話すタイミングなどにちがいはありますが、衰えや喪失のなかで抱く悲しみやさみしさ、不安や心配を聴きとって、職員と共有し支援を考えてきました。

近年はみなさんの加齢による変化だけでなく、支援する職員の状況もきびしくなっています。高齢期となった人たちに對して介護的な対応が増えていることは否めませんが、これまでに積み重ねてきた生き方、暮らし方が高齢になった人たちの日々を彩っています。

衰えと喪失が増えていても、今なおねがいをもって悩みながら、発達主体としての穏やかな輝きをみせています。